
夜の散歩

之ち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夜の散歩

【Nコード】

N7635U

【作者名】

之ち

【あらすじ】

私には趣味がある。

そう誰にでもなくつぶやく彼女の心。誰にも見られず、誰とも会わず、ただ、ひっそりと自分だけの世界を愉しむ。

いつの頃からだったか。自分には他人とは違う趣味が出来ていた。私の家は比較的都市部に近い場所にあり、コンビニが一本の道に数件並ぶような風景が視界の果てまで続く。昼間は人通りも多く老人やサラリーマンから学生まで歩いている。おまけに車の通りも激しく大通りには絶えず走っている。

そんな風景も夜になると世界を隔てたように様変わりする。

夜の十一時四十分頃が変化の時間。

その時刻を持ってして歩行者の数は激減する。決してゼロではないが昼とは違う。皆、肩の力を落したように歩く。足にも元気が無い。昼間の仕事でくたびれている証拠だ。彼らと交代するように深夜の仕事に出かける人たちが現れる。ひと目見ればどちらが前者かは一目瞭然である。

だが、まだだ。

私の趣味には時間が早すぎる。まだ人が多すぎる。会社帰りのサラリーマンが帰宅し、アルバイトたちの交代時間が過ぎる。学生たちはすでに帰宅し朝を待つ。誰もが休みを取る時間を待つ。

それまで私はベッドの中で短い安らぎを得て心を落ち着かせる。

この時間から私はいつもの妄想に浸る。

深夜、一時半になってからが私の趣味の時間。

すでに誰の姿も無い。

上下黒のジャージに着替えると顔を隠す深い帽子をかぶる。家族にばれないように玄関を出て夜の世界へと繰り出す。当然、辺りには人の姿は無い。

道に出ると外灯の光がぼんやりと浮かび上がっている。少し首を持ち上げればまだ眠っていない近所の人たちが灯りをつけている。

いつもの光景だ。

私はこの時間から約十分の時間を掛けてある自販機のところまで

行く。なぜ、自販機かというところあるジュースがとても好きなのだ。

五年前、ある桃味のジュースが発売された。大手の飲料販売会社が製造したのではなく町工場で生産している小さなメーカーのものだ。しかしみくびってはいけない。そういう小さなメーカーだからこそ稀に生まれるのだ。

これだ、というべき味が。

その桃味の美味さといったらとても自販機で買えるような代物ではない。しかも百円玉一枚で500mlが入るといっから病み付きになる。口いっぱい広がる芳醇な香りと濃厚な味、それこそが全てだ。

そして今、その自販機はひっそりとある工場の敷地内に佇んでいる。工場の敷地内といっても入り口から丸見えの車四台並べるのが精一杯の場所だ。いつでも外部から入る事はできる。私は目的のジュースを買いに行く。

道に出ると、世界がやけに冷たくなる。

忘れてはならない。これは私にとって趣味なのだ。

夜の散歩にはルールがある。

絶対に誰とも会わない、見られないこと、だ。

秘密にする理由はない。ただ、この夜の町がまるで自分だけの世界であるように感じる事が大事なのだ。誰にも会わず、誰もいない、この世界が堪らなく好きなのだ。

自販機までのルートは決まっている。大通りに出る事無く一本奥へと入り小さなわき道を歩く。そこには信号もなければコンビニにも無い。あるのは大手メーカーのロゴが入った自販機とちかちかする外灯。

外灯の光は私のほうへ向かって影を伸ばすように設置されている。つまり前から誰かがやってきた場合、私は物陰に隠れる。自分でもその現場を横から見れば不審者だろう。けれど、これはこの散歩のルールなのだ。

今夜も自販機へと無事たどり着く。

もちろん誰とも出会っていない。毎日、この散歩を続けて人と出会った回数は四回だ。もう毎日やってるから何回やったかは憶えていない。確立にすると5%もない。もし他人と出会った場合どうするか。答えは簡単だ、何もしない。が、その日は気分が壊されてしまったため、いち早く家に戻る。戻った後は朝まで寝る。

頭のいい人からしてみれば何をしているか解らないだろう。自分だって何か目的があるわけじゃない。

ただ、夜の町は薄青の空気が充満する世界。外灯の光に漂うほこりすら美しく見えてくる。誰もいない道を歩くと気分が晴れる。

ただ、それだけ。

帰りの道でサイレンが聴こえた。警察じゃない。救急車だ。場所は……ずいぶんと遠い。サイレンの音はルールに適用されない。私の視界が届かない場所は適用外だ。

家の灯りが近付いてくる。

今夜もそろそろ終わりだ。

私はこんな意味の無いことを繰り返している。たった二十分ほどの間に掻く汗は少量だけど身体は熱く火照ってる。ジューズを頬に当てて空を見た。

町のご真ん中では滅多に見れない月がそこにはあった。

今日はいつもより気分よく家に入った。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7635u/>

夜の散歩

2011年7月13日06時19分発行